
Happy ガーデン

酢羅射無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Happy ガーデン

【コード】

N92720

【作者名】

酢羅射無

【あらすじ】

そこにあるのは争いばかりだった。いつもそうだ。なんで俺だけ・
・。

僕はまだ…知らない、妹を見つけだすために…。

オレはな、母さんみたいになりたいんだよ。

あーもう無理無理…。神なんて…

私はお義姉さまのためなら…。

そんな彼らの思いが重なり、物語の舞台が今、開かれる…！

ー くすくす…さあ、行きなさい…！ -

酔：僕もいるよっ！

書：氏ね！！この変態！！

酔：なんだとっ、このナルシー！！

書：はあ？！僕の可愛さをねたむなよ、

語：うるさいわよっ！！私の詩を汚したら許さないんだからっ！！

飛：あー帰りてえ…。

担当

絵：酢羅射無

小説：書記

詩：語り

ネタ集め：飛河

書：……。飛河、寝るな。

飛：ZZZZZZ…

こんな感じでお送りします^^

〈始まりの詩〉（前書き）

はじめに。

この小説は元々マンガで描いていたものです。しかし、（ノート）一冊はなんとかできましたが二冊目から挫折してしまいました。

でもここでやめるのはなんか嫌だったのでちょうどいいしこれで小説の練習しようっ！

・・・というわけで小説にされたものです。

小説が大の苦手な私がかいております。

なのですごい変になっているかもしれない。

あと途中で脚本になったりする可能性大です。

く始まりの詩

いた。
広き海の上に小さき船は浮かんで

船。
小さき船はとても立派な海賊

供たち。
船員はみな二十歳も満たぬ子

毎日毎日不満を抱えて

一体どこへ

ゆくのだろうか・・・

死をもたらすは我的心。

我的心はその暗き森にあり。

暗き森は幼き少女を捕らえて

我的心を満たしていった。

幼き少女は人の形を忘れて

魔女へと姿を変えていった。

魔女は暗き森の奥の

神の住む美しい楽園へ。

神は突然現れた魔女を嫌い

魔女を追い出そうと必死だった・・・

く始まりの詩く（後書き）

マンガのほうではいなかった主人公を小説のほうで新たに増やしました！

名前はロシエで一応女ですっ！（見えないケドw）

ヘタレなのですぐ泣きます。前半全然目立ちません。

貧乳なので男とよく間違えられますw

一言でいうと ワールド イズ 不憫w w

全然主人公ぼくなくてすいません・・・；；；

こんなんですが頑張りますのでどうかよろしく願いしますっ！！

あと感想やアドバイス等もできればお願いします！！

↳ 転校初日の巻

> i 1 4 0 1 4 | 1 9 5 4 <

> i 1 4 3 1 2 | 1 9 5 4 <

キーン コーン カーン コーニー

キーン コーン カーン コーニー…

午前の授業を終え、チャイムが鳴った。ようやく昼休みだ。

「はあ〜… やつと昼休みかあ〜…。 やっぱ初日は長く感じるなあ…。」

特にここの授業は僕のいた田舎よりかなり難しいのでちんぷんかんぷんだ。

「転校生〜〜っ!!」

そう叫んだのは同じクラスの白河しろがわ 真花まかの乃だった。

「なっ、何??」

「どーしたの? ため息なんてついてさ?」

「ああ… えーっと、君は…?」

彼女はやたらと前髪が長い。なので顔がよくわからなく、怪しい人に見えない。

多分、そんなことはないのだろうが…。

「白河だよー！w “白ちゃん”って呼んでっ！…」

「し…白河さん…、そりゃあため息もつきたくなるよ…。まだ慣れていないからさ…。」

「ふーん〜そーいうものかあ〜」

「うん…それに都会に来たのも初めてだし…。」

「あはははっ！言っとくけどここ、ゆーほど都会じゃないよっ！」

「え…？そうだったんだ…」

ここよりすごい都会があるなんて…想像すらできない。

「私的にはこんな所を都会というあんたの田舎がすごく気になるけど…大変だねえ〜w まっ！大丈夫っ！！そのうち気がついていたら慣れてるよ…！」

「そうだといいけど…。」

確かに、時間がたてば慣れるだろう。しかし、それまではどうすればいいか…。

「おい！その転校生…！」

突然怒鳴られた振り返ってみると、同じクラスの（というより教室にいるのだから同じクラスの人しかいないのだが…）いちのせ 壱ノ瀬 マリ
ーが怒ったような表情でこちらを睨みつけていた。

「え……えーつと……」

「どーしたのー？マリーちゃん？なーんかすっごい顔だよ？」

「うるせえ白っ！ー！お前に用はねえよっ！……おい……」

「はっ、はい？」

なぜか知らないけどすっごい怒っている。全然わからないけど怒っている…

「確か……坂口って言ったか。今からオレと校長室に行くぞっ！」

「え？は？？」

意味がわからない。なんでいきなり怒鳴られいきなり校長室に行かなくちゃならないんだ！？僕何かした！？転校初日で！！？？

「は？じゃねーよ、とにかく行くぞっ！ー！」

「いやあの…なんで？？」

「いいから来いっつてんだよっ！ー！ー！ー！ー！」

「あははははっ！もしかしてマリーちゃん、まだあのこと引きずってるの？あはははっ！ー！ー！」

「うるせえ！！ほつとけよ白っ！！！！！！」

・・・さっぱり分からない。何故白河さんがこんなに笑っているのか、何故マリィさんがこんなに怒っているのか、そもそもなんで僕がこんなよくわからない状況になっているのか・・・
さっぱりわからない・・・

「ちょ、ちよつと待てよお前ら！！」

今度はなんだ…って、この声・・・

「あははははっ！なーなー！にしているのかなあ　ロシエくん？そんなところですかっ！」

ロシエく…いや、ロシエさんは何故か天井にぶら下がっていた。

「うるせえ！！ちよつとそこに爆…い、いや！なな、なんでもねえ！
！なんでもありません！！いやもう本当、何でもありませんから！
！本当、ごめんなさい！！ごめんなさいコノヤロー！！！！」

「あははははっ！男の子なんだからそんな弱気じゃだめだよーw」

「男じゃねーよっ！！俺はこれでも女だっ！！！！！！」

聞いていてわかるようにロシエさんはすっごく男みたいな人だ。この学校は一応制服があるけど特に服装に制限がなく、私服で来てもいいことになっている。なので彼女の服装は白い帽子に長袖のブラウスに半パン。それとブーツという格好になっている。

そのためか、どうみても女の子には見えない。スカートとか着れば

またイメージが変わるのだろうが、僕が思うに彼女には似合わないと思う。

「で、お前はオレに何か用かよ？こっちは超不機嫌なんだがぁ・・・」

「えっ・・・あ・・・その・・・覚えていやがれコノヤローーーーーー
「！！！！！！！！！！」

ピュウウウウウウウウウ

なんだかよく分からないけどロシエさんは猛ダツシュでどこかに行ってしまった。泣いていたように見えたのは気のせいだろうか？

「バカは去った。じゃ、行くぞっ！」

「え・・・いやだから話がよく・・・」

「わからなくていいんだよっ！！とにかく来いっ！！！！！！！！！！」

「え・・・？あの・・・ってぎゃあああああああ！！！！！！！！！！」

急に首回りを掴まれた。

「いやその痛いっ！！痛いです離して！！」

「うるせえ！！！！！！黙ってるっ！！！！！！！！！！」

ズルズルズル・・・

そうして僕は何も分からないまま、校長室に連れて行かれたのだっ
た……。

↳ 転校初日の巻 (後書き)

元々一っだった序章をいくつかに分けましたっ！
細々としていますが、まー・・・気にしないで下さいw

転校初日で校長室!?!の巻

こうして無理矢理マリーさんに校長室前まで連れて来られた僕だったが、やはり緊張する。実のところ、入学手続きの際、変な頭がハゲていて目がスライムとかと同じで常にダブルピースして“ひぐめんなさいWP-S!”とか言ってた男がしてくれたので校長先生に会うのはこれで初めてということになるのだ。どんな人だろう…。

「ほら、いつまでもんなとこでボサっとしてねーで入るぞ！」

「あ…うん…。」

しかし、マリーさんは何故こんな…校長室なんて所に僕を連れてきたのだろう…?まだ何もしていないはずだけど…。
ってか、なんでこの人校長室にこんな気軽に来れるの!?!…もしかして…慣れてる…?

コンコン

そんな僕の思いなんて無視してマリーさんは校長室のドアをノックした。

「どうぞー」

中から女の人の声がした。

ガラッ

「邪魔するぜー」

(…強引な入り方だな…)

そう思った僕だがあえて口に出さないでおいた。
それよりもしかしてあの人が…。

「いらっしやいマリー。それと、今日転校してきた坂口夕矢君だね
」？

「え…あ、はい」

彼女こそ、この落下宮学園校長、柊李野ひいらぎののようだ。見た目は20
代後半だろうか、ずいぶん若い人だ。校長先生っていうからもつと
年いっていると思っていたのに…。もしかして、都会の
みんなこんななのかな…？

*なわけありませんよ…。

「え？なっ、なに??」

「あ?どうしたんだ?」

「あ…いや…別に…。」

ふいに変な声が聞こえたので振り返ってみたが、誰もいなかった。
気のせいだろうか?

「?まあいい…兄は?」

「もう帰ったよ。」

「はあ！？あいつまたかよ！？」

「うん。なんか、早くお母さんに会いたかったぞ。」

「あのマザコン~~~~~!!!!!!」

にしても・・・マリーさん、なんでこんなに校長先生に対して馴れ馴れしいのだろう・・・つてか兄つて・・・？

「あの・・・マリーさん、君は校長先生とはどういう関係なの？つてか僕を連れてくる必要あったの？帰りたいんだけど・・・」

「ああん？」

「いつ、いえ・・・なつ、何でもありません・・・」

すごい顔で睨まれたので僕はそれ以上何も言う気になれなかった。すると、その様子を見てか、校長先生が笑い出した。

・・・しかし…今さらだがあの頭についている（生えている？）ネコのような耳はなんだろう・・・

「はははw私はマリーの兄、つまり理事長の友人なんだよw」

「ええ！？」

理事長がマリーさんの兄！？そんな偉い人が兄つて！！

親ならまだしも兄弟つてことはそれつてすつごく理事長が若いつてことだろ！？ええ・・・ええええええ！！??????

「もちろん本物だよw私元猫神なんだーw」

「やっぱしっ!?!?!」

人間だと信じたかった僕は改めてショックを受けた。・・・元猫神
つて・・・;;;

。 マリーさんといい、校長先生といい…なんで人間がいないんだ…。

「?どしたんだよお前?」

「いや、別に・・・」

「あそう。じゃ、バカ兄もいねーみてえだしオレ帰るわ。」

「はあ!?!?!?」

「いやいやいや!?!?!なんでそんな冷静に帰るとか言ってるの!?!?僕
を連れてきた意味は!?!?」

そんなことを思っている内にマリーさんは部屋を出て行くこととする。

「ちよ、ちよっと待ってっ!?!僕を連れてきた意味は!?!?」

「あ?もうねーよ。じゃあな」

当然のような口調でそう言い、部屋を出て行ってしまった。

「何それっ!?!?」

そんなマリーさんの態度について堪忍袋の緒が切れた。

「何あれ！？何なのあの態度っ！！勝手に人を連れ込んで“ありがとう”とか“ごめん”の一言もなしかよっ！！」

完全に我を忘れて怒っている僕に校長先生は落ち着くように言ってくれた。

「まあまあ、あの子はそういう子だから……。それより君ももう帰った方がいいよ。もうチャイムが鳴るからさ。」

気がつくのとあと三分くらいで昼休みが終わろうとしていた。いつの間に……。ってか僕の昼休み…潰されたな。

「で、では失礼します……。」

そうして、傷付きながらも教室へと帰っていった……。

転校初日で校長室!?!の巻 (後書き)

坂口夕矢さんねーんwww

きつと昼飯も食ってないよねw

ちなみに作中の*印のところはすら犬の台詞です。
書記ではありません。

魔女の誕生（前書き）

久々の更新（^^）；
遅れてしまつて本当にすいません…；
今回は詩だけで失礼します。

魔女の誕生

ここは暗き闇の中…

“…ここは…どこ？…私は…”

記憶は闇に呑み込まれ 残るは白き帽子と…

“兄さん…ごめんなさい…”

あなたに会えなくなってしまった…

まだ顔も名も知らない…私の兄さん…”

残りわずかの記憶すら消え失せ、

少女は闇の中へと消失する

壊れて、壊れて壊れて壊れていった先に残るは少女の骸^{ざんがい}

やがてその骸には新たな人格が宿った

その心は冷たき心

もう…何も残っていない…

しかし…少し…ほんの少しだがまだ…優しき心も残っていた…

その証拠に彼女は一匹の白き鴉を助け出した

その行為に深き意味はないようだが…

彼女に心はなくとも力はある

生命を作ること…奪うことも…

それゆえ…“魔女”と呼ばれた…

く下校時間の巻く

なんだかんだでいつの間にか放課後になっていた…

「はあくやつと終わったあく。なんだか長い一日だったな…。」
そう言いながら坂口は大きくのびをした。

「帰ったら何しよう…。まずは部屋を片付けなきゃ。…今日中には絶対終わらないだろうけど…。」

「おい」

声を掛けてきたのは同じクラスのキルだ。何故か知らんが彼は真夏でもいつでも常コートを着ているらしい。

「キル君！」

「一緒に帰らないか？」

「うん！一緒に帰る！」

「ん、じゃ早く行こうぜ。」

そうして二人は教室から出ていった。

キル君は僕の隣の席に座っている。最初、左目に大きな傷があつて怖い人なのかと思っていたけど、話してみるとすごくいい人だった。だから僕たちはすぐに友達になった。白河さんは怪しいし、マリーさんは色々と怖い。それに対して、キル君は見た目は怖いけど実はいい人だから僕の知る限り一番まともだ。

…つてか…この学校…変な人、バツカ…。

「ところで、坂口はもう部活とか決めたのか？」

「え…まだ。」

そもそもそれどころではない。引っ越しの準備やらでやつと今日荷物だけ家に置いただけで片付けてない。それどころか、実家から直接学校に来たのでまだ家にすら行っていないのだ。

「そういうキル君こそ、部活入っているの？こんな時間に帰っているけど。」

時刻はまだ三時を回ったところだ。部活に入っているなら、こんな時間に下校というのはありえない。

「まつ、まあ…一応。」

そう言いつつ、少し目を逸らしている。その様子を見て、坂口は二ヨニヨしながら続けた。

「へえ〜？こんな時間帯に帰れる部活とかあるんだあ〜？」

「きよ、今日は部長がいねーから休みなんだよ！だつ、だから決して俺がズル休みしているとか、全然そんなんじゃないんだからな！勘違いするなよ！！」

最後のはかなり余計ですすいません私作者の趣味です本当にすいません。

「ふーん…。で、どんな部活に入っているの？」

「え…」

またもや困ったような顔をする。果たして彼は本当に部活に入っているのやら…。

「うるせー！ちゃんと入っている！！」

「え！？なつ、何？？」

「あ…いや…。」

「？まあいいや。それで、どんな部活？」

「え…えーっと…どう説明すればいいのか…。」
なにやらブツブツ言いながらイメージを膨らませる。

「うーん…カムチャッカ半島のマチユ・ピチュとかは高所恐怖症のバブーシュカ…マクロファージとヘモグロビン、血みどろHAS…
PDAとDDPがKGBやTGVでも通常の三倍のBCGで…」

「キ、キルくん…？」

「うん、まあ…そうだな。一言で表すとこんな感じ」

「いや、意味わかんないから。」

謎で謎すぎる画像。共倒れしているナルシズの一人、書記とカスでヘンタイヘタレなすら犬。その上、さらに止めと刺そうとしている謎のネコとその様子を遠くで見ている飛河。本当に謎で謎すぎる画像。ちなみに、部活の内容とは（多分）関係ありません。

「う…ま、まあ行ってみたら分かると思うぜ…多分。」

「うーん…。それだと説明になっていないと思うけどね…」

っていうかあれを説明するなんて、天地がひっくり返ってもアホなすら犬には無理だろう（笑）

そんなことをペラペラとしゃべっている内に分かれ道に着いた。

「あ…僕、こっちの道なんだけど…」

そっつい、坂口は右の道を指さす。

「そうか。俺は左だから道違うな…。じゃ、明日。」

「あ、うん！じゃあ明日もここで待ち合わせしようよー！」

「ああ。分かった。」

そうして二人はそれぞれ別々の道を辿り、帰宅したのだった。

帰宅後事件の巻（前書き）

今回ちょっとグロいかもー！。

帰宅後事件の巻

坂口の家は一人暮らしなのでもちろんアパートだ。それもけっこう古い。数年前までは物置きとして使われていたらしい。それゆえ、凄く埃っぽいということで家賃が他のと比べるとすごく安いそうだ。実家が決して裕福ではない坂口は、とにかく安いその部屋を選んだのだ。

ガチャ。

「は〜つかれた〜。」

独り言を呟きながら部屋に入ると何故か、何故だか見知らぬ女性に迎えられた。

「あ…お帰りなさい。」

「いや誰だよ。」

部屋を間違えたわけではない。その証拠に彼女の後ろには坂口の荷物的大量にある。そして同居人がいる覚えはない。一応一人部屋だ。というより、ここには鍵が掛かっていたはずだ。今だってちゃんと鍵を開けて入ったし…。

…もしかして、不法侵入？

*もしかしてじゃなくてぜったい不法侵入だろ（笑）

「…私は白鴉^{はくあ}。あなたこそ誰ですか？」

白鴉はちよつと怒ったような口調で言った。

「僕は坂口夕矢。で、白鴉…さん。何で僕の部屋にいるの？」

というかどっから入ってきたんだ…。壊された形跡もないし…。

「はい？」

その声は優しいもの…かと思われた。しかし…

「あなたの部屋ですって！！？ふざけないでよ！！！！ここは私の部屋よ！！お義姉^{ねえ}さまに貰った大切な部屋よ！！！！私はずっとここで暮らしてきた！！それをあなたごときに盗られてたまるものですか！！！！！！！！」

「…えええー…。」

急に鬼のような形相で睨みつけられ怒鳴られたので坂口は驚き、今にも泣きそうな顔になっていた。

白鴉さんの部屋…？一体どういうことなんだ…。とっ、とりあえず彼女に順々に説明していこう…。

「あっ、あのね？確かにこれまでは僕の部屋じゃなかったんだけど、今日から僕が買ったから僕の部屋なんだよ？そ、それにここ空き家って聞いたから買ったので白鴉さんの部屋じゃないと思うんだけど…。」

震えながらも様子を伺いつつなんとか言えた。

「…。引っ越し？」

まだ怒っているようだったがさっきよりは随分落ち着いた様子で語りかけた。

「え？あ…うん…。」

「そう…。」

坂口がまた怒られるんじゃないかとビクビクしているのを横目に、白鴉は軽く息を吸った。

「よかったです」

!?

さっきまでの表情が嘘のような笑顔で微笑んだ。

坂口はあまりの変貌ぶりに目を白黒させている。

「失礼しました。あなたが今日からお義姉さまの奴隷になりに来た人ですね！これからよろしくお願いしますわ！」

奴隷!!?

いきなり微笑んだかと思っただら今度は僕が奴隷!?!どういうこと!?

っていつかなんで引越して早々こんな目に会わなきゃならないんだよ!?

坂口はもうわけが分からないといった様子で目をぐるぐると回している。

「ちょ、ちょっと待って!あの、ど、奴隷って...!」

「あら?知らないでここに来たのですか?...ふふっ、仕方ないですね。教えてあげます。」

白鴉は少し見下して言った。

「この街に住む人はみんな、みーんな!お義姉さまの奴隷なんですよ!...!」

なにいいいいいいいい!!...!!...!!...???

坂口はその言葉にショックを受けすぎて倒れ込んでしまった。

その様子を見て、白鴉はクスツと笑い、坂口の肩に優しく手を置く。

「うふふ、というわけで早速奴隷としての仕事をやってもらいますけど...心の準備はいいですか?」

「もういいです…好きにしてください…」
もう何もかもどうでもいいって様子で坂口は答えた。まあ、無理もないだろう。引越してきて、いきなり奴隷だとか言われたのだから。こーんな、どーみても一般人以下の地味ヤローに理解するのは皆無でしょうね〜（笑）

そんな坂口の様子を見て、白鴉はくすくすと笑い出す。

「ふふっ…うふふふ…では…。」

『死んでください』

白鴉の袖からはいつの間にか注射器が覗いていた。

坂口は危機感を感じ、慌てて起き上がる。

「…注…射器…？」

あの色は…どうみても医療用のものではない。あれは…毒物！？あれを…僕に打つ気が！？

坂口がそんなことを思っていると白鴉がまったくくすくすと笑った。

「ふふ…そうですよ。これは毒物です。」

「…！」

口に出した覚えはない。なのにどうして…

思えば白鴉は着物を着ているせいかもしれないが手足が見られない。それに、よく見れば浮いているように見えるし、注射器も宙に浮いているようにしか見えない。

「ふふふ…でも安心して。これは非常に毒性が弱いから…。運が良ければ生き残るかもしれませんよ？まあ、それはあまり望みませんが…ふふっ」

そう言いながら注射器の中の液体を少し出して見せる。

…坂口は覚悟をしていた。きつと、もうすぐあの注射器に打たれて、

苦しみ、もがきながら…やがては死に至るのだろう。
何一つ、わからないまま…。

だから僕は死にたくなかった。まだまだ未練は残っているし、何より死ななきゃならない理由が分からなかった。

悪いことはしていない、とは言いつれない。人間なのだから。
しかし、直接、誰かに恨みを持たれるようなことは断じてしてない。
たった齡16の人生…何かをしたとしてもそれは小さいものだ。それなのに…

それなのに、この人、白鴉さんは僕を殺そうとしている。彼女と会うのはこれで初めてだ。初めてだというのに何故殺されなければならぬのだろうか…。これではまるで…

「…何故、僕を殺す必要がある？」

「別に殺す気なんてないですよ。…うふふ、ただ、テストに協力してもらいたいただけですよ。」

「テスト…。」

やっぱり…この人は命を弄んでいるんだ。父さん…みたいに…。

あの時…知瀬を無造作に殺した…父さんと同じ…。

坂口は怯えながらも力の限り思いっきり白鴉を睨みつけた。

「うふふ、そんなに怯えなくてもいいですよ。私は別に命を弄んでいるわけではありません。このテストはあなたじゃないと意味がないのです。」

「どういう…こと？」

「うふふ…だって、」

だってあなた、今日あの学校に行ったのでしょ？

「……………!!……………なっ……………」
いままで以上の凄い顔で睨まれて声にならなかった。その表情は怒り、というレベルではない。しかし憎しみ、とはなにかが違う…。そんな、初めて見るような表情だった。

「あの学校だけにはお義姉さまも近づけないのよ。お義姉さまはある特殊な気体が流れているって言ってたわ。だからそれが分かれば……………」

気体…？どういうことだ？それと僕がなんの関係があるんだ？時間が立つたび分からないことが増えてくる…。

知りたいを思う度に疑問が生まれてくる…。

「一体…君は何を言っているんだ…。それに…その… お義姉さまって一体……………」

「ふっ…あなたは知る必要ありません。だってあなたは……………」
白鴉がくすくすと笑いながら坂口に近づき、そして……………」

グサッ

危ないと感じた時にはもう遅い。すでに坂口の喉元には注射器が刺さっていた。

その瞬間、全身に何ともいえないような痛みが走り、呼吸ができなくなる。

「がふっ」

口から大量の血が吐き出される。

「ごはっ」

苦しみのあまり、目から涙が出てくる。そのうち、血も出てきそうなくらいだ。

そして何回も何回も吐血を繰り返し、意識がもろろつとしてきて、立つことができなくなり、ついに倒れ込んだ。

しかし、その衝撃を感じることは出来なかった。感覚はもうなく、

血だけが吐き出されるだけだった。

白鴉はその様子を見て黒い笑みを浮かべ、坂口に背を向ける。

「だってあなたは、もう…死ぬのだから」

そして再び坂口の方を向き、哀れむような眼で見る。

「うふふふ…ごめんなさいね。本当はもっと楽に死なせたかったんですけど、こうでもしなければ意味がないから。」

白鴉は胸に両袖を当て、目を閉じる。

「あなたはいい奴隷だった…これであいつらも少しは…うふふふ」

あい…つら…？

しかし、坂口には考える気力がもうほとんど残っていない。

目の前が段々暗くなっていく…。

「ではさようなら。我が親愛なる奴隷。坂口…夕矢さん…。」

坂口が完全に闇に溶け込んだ時、白鴉の笑い声だけが響いていた…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9272o/>

Happy ガーデン

2011年10月8日03時25分発行